

## 第5章 長島町フィールドワークの記録

荒武賢一郎

### はじめに

2011年の天草フィールドワークは、7月25日に鹿児島県出水郡長島町からスタートした。古来、長島は肥後国天草郡に属し、地理的にも天草諸島に位置づけられていたが、薩摩島津氏の支配を受けて戦国時代以降、薩摩国出水郡となった。明治維新以後、1889年（明治22）町村制施行に伴い、東長島村と西長島村の二つの自治体が誕生し、戦後それぞれ東町・長島町に発展した。2006年（平成18）、両町は合併し、現在の長島町が成立している。現在の町域は、長島（本島）のほか伊唐島・諸浦島・獅子島など大小23の島々からなる長島列島で構成され、人口はおよそ11,000人余りである。長島と阿久根市を結ぶ全長500メートル余りの黒之瀬戸大橋が1974年（昭和49）に開通し、長島と伊唐島の間にも1996年（平成8）伊唐大橋が架けられ、交通面では一層の拡充が図られた。

私たち調査メンバー一行も2011年7月25日朝、新大阪駅から新幹線に乗り、昼頃に出水駅（鹿児島県出水市）に到着した。3月12日開通の九州新幹線で我々の移動もスピードアップしたが、そこから1時間ぐらいバスに乗り、長島町歴史民俗資料館にたどり着いた。

### 1. 長島の歴史研究について

古くは「仲島」あるいは「大仲島」と呼ばれた長島は、4世紀ごろには天草諸島の島々とともに有明海や八代海を支配していた肥君（火の君）一族の勢力下に入った。長きにわたって考古学の発掘調査が進められ、当地は「古墳の島」と呼ばれるぐらい、5世紀から7世紀にかけて200基以上の古墳が造られたようである。室町時代には「天草八氏」の一角をなす、長島氏が領主であったが、戦国大名の相良氏や島津氏などの勢力拡大により、最終的には島津氏の支配を受けることになった。これが薩摩国に帰属する契機であり、現在鹿児島県となっている由縁でもある。

このような長島の歴史や文化を極めて詳細にまとめているのは、『長島町郷土史』（長島町、1974年）である。これは、黒之瀬戸大橋が開通した年でもあるが、明治百年記念事業のひとつとして編纂された自治体史で、丹念な歴史・民俗調査によって、多くの歴史的事実が明らかにされている。また、長島東部に関しては『東町郷土史』（東町、1992年）もあり、地元の「郷土史」に関する熱意が窺える。

## 2. 地域文化発信の拠点——長島町歴史民俗資料館——

7月25日午後、歴史民俗資料館に到着した我々を出迎えてくださったのは、山崎友喜氏（長島町教育委員会社会教育課長）と坂元耕作氏（同課長補佐）であった。春の準備段階で長島訪問の打診を申し入れた際に教育委員会にはすぐに快諾をいただいた。依頼をしたときには全く存じ上げなかったが、山崎氏は関西大学法学部卒業後、生まれ故郷の当地で役場に就職して、この歴史民俗資料館の開館事業を担当されていたことがわかった。



写真1 山崎友喜氏の講演①



写真2 山崎友喜氏の講演②

最初に、山崎氏から「長島の歴史と文化」について講演を頂戴し、当地が歩んできた歴史の深さを学ぶことができた。次いで、山崎・坂元両氏の丁寧な解説で、資料館の展示を見学した。同館は、3つの展示室から構成されている。

第一展示室は、考古・歴史を中心に、「長島の自然」・「遣唐使船の長島漂着」・「薩摩藩政下の長島郷」・「海に生きる」・「海が伝えた焼物」などのテーマごとに紹介されている。町内の獅子島は、今回のフィールドワークでも拠点となった御所浦島（天草市御所浦町）の南に浮かぶ島で、御所浦島と同じく「化石の島」としても有名である。この獅子島の特質や、「古墳の島・長島」を物語る貴重な出土品が所狭しと陳列されていたのは圧巻であった。また、我々の調査の主要課題でもある「海を越えた文化交渉」についても、遣唐使船の漂着一件を皮切りに、ヒト・モノの交流が盛んであったことを裏付ける展示品があり、我々が持つ長島のイメージをさらに豊かにしてくれた。

第二展示室は、民俗文化がメインになっている。長島は、温州ミカン発祥の地として有名であり、最近ではジャガイモ（赤土バレイショ）が当地の主力特産品である。これは、温暖な気候、粘土質の赤色土壌（赤土）を有する長島ならではの農業形態ともいえるが、漁業や焼酎生産と並ぶ地場産業の基盤を形成している。山崎氏が地元の小学生たちに資料館の展示を解説する際、「なぜ長島のイモはおいしいのか？」と問いかけるそうだが、その答えはここにある。特徴深い長島の農業史を語る展示では、農具類・養蚕・木挽道具・衣服・食器類など、かつての農村風景を彷彿とさせる原物資料が陳列されている。これらの多くも、山崎氏が開館準備をしていたところに、町内の家々から協力を得て収集されたようである。

第三展示室は、「衣」・「食」に続き「住」の復元である。戦前の農家をイメージしているこの部屋には、囲炉裏や火鉢が配置され、あんどんやランプなどの照明器具、茶箆筒や長持などの家具類が並べられていた。現代化されている長島の家庭ではほとんど残されていないであろう民具の数々を目にすることで、いろいろな歴史イメージを考察することができた。

### 3. 現在の長島を歩く

続いて、資料館では古文書類を中心に閲覧を実施した。中世から近現代に至るまでさまざまな文書が保管されているが、そのなかで最も古いものは「千竈文書」である。この文書群には、鎌倉時代末期、南北朝および室町時代の中世史料が含まれている。詳しい内容は、調査・分析を手掛けられた五味克夫氏の論考があるので参照されたい（五味克夫編『鹿児島県史料拾遺（X）志布志大慈寺文書 長島千竈文書』1967年刊）。

その後、短時間ではあったが山崎氏のご案内で町内のフィールドワークへと足を向けた。最初に訪れたのは資料館に程近い小浜地区である。爽快な海に面した小浜地区は、穏やかな雰囲気を持つ漁業集落で、民家を囲う防風石垣が残るところもあった。これも長島における「石」の文化を象徴するものである。

時間の関係で詳しく内部を見学することができなかったが、長島町平尾には長島醸造有限会社がある。同社は、焼酎生産を行う地元企業で、いまや全国区となった芋焼酎「島美人」や「島乙女」、そして島内でしか販売されていない「島娘」がここで醸造されている。



写真3 長島町小浜地区の風景

### おわりに

長島町からフィールドワークをスタートさせたことは、翌日以降の天草調査に向けての大きな糧となった。それは、山崎氏、坂元氏のご厚意によって、地域の人々からお話を聞く、資料展示の構成を考える、そしてフィールドを実際に歩く、といった一連の活動を凝縮した形で経験できたからである。

そして、長島と天草の共通性や相違点など、全体調査のひとつの目安としても非常に貴重な一日であった。協力してくださった皆さんに御礼を申し上げて、筆を擱くことにしたい。